



4

秀吉に従い、播磨平定を進める官兵衛であったが、三木城攻めの最中に予想もなかった事態が起こる。摂津有岡城主、荒木村重が突如、信長に謀反を起すのである。さらに主君、小寺政職までもが村重に呼応して信長に反旗を翻そうとする。官兵衛は政職に裏切りをいさめるが、政職は聞く耳を持たず、官兵衛に次のように言う。



官兵衛が幽閉された有岡城の跡の石垣—伊丹市

報恩の至り

裏切られても いちぎずに

されてしまう。

一方、信長は官兵衛が有岡城から帰らないことから、官兵衛が村重に寝返ったと考え、秀吉の元に預けられてい

た嫡男、松寿丸(後の長政)の殺害を命じる。しかし、竹中半兵衛は官兵衛に限って寝返るはずはないと考えて松寿丸を引き取り、本拠地の菩提山城にひそかに匿う。

有岡城の牢に閉じ込められた官兵衛

に対し、栗山利安らの家臣が近づくとを大目に見るなど、何かと便宜を図ったのが牢番役に加藤又左衛門。官兵衛は又左衛門の配慮に感謝し、「無事に牢から出られたら、そなたの子を養子としよう」と約束する。

1年後に有岡城が落城し、官兵衛が救い出されたとき、信長は松寿丸の殺害を命じたことを後悔し、「官兵衛に

合わす顔がない」と嘆いたが、竹中半兵衛が松寿丸を隠し置いて無事であることを聞き、大層喜んだという。半兵衛は、秀吉の三木城攻めの時に亡くな

ったが、官兵衛と長政は半兵衛の恩を忘れず、長政は半兵衛の孫、重次を家臣に召し抱えた。

牢番役だった加藤又左衛門は有岡城の落城時に行方不明になるが、官兵衛は約束通り、次男を養子に迎え、黒田三左衛門と名乗らせた。子孫は後に福岡藩の長老として幕末まで黒田家を支える。

居城の御着城が落城し、毛利を頼って備後鞆の浦に落ちのびた政職に対し、その子、氏職が落ちぶれて暮らすのを見て哀れに思い、秀吉の許しを得て客分として召し抱えた。政職に裏切られたとはいえ、官兵衛は自分が今日あるのは小寺家のおかげと考えるのである。

世話になったことに恩義を感じることは珍しくないが、裏切り、寝返りが横行した戦国時代、自分を裏切った主人にも恩で報いる、いちぎなところがいかにも官兵衛らしい。

(播磨の黒田武士顕彰会理事 今藤久夫、写真も)

― 次回は7月4日に掲載予定です。